

タイトル「スマールス・ライク・ア・ベンチャー・スピリッツ」

著者名 くらいわゆり

あらすじ 野心的なCEOナリタが挑む講演の舞台裏とは…。

文字数 2076

ナリタと秘書は目的地のホールに着いた。入口には「これからの日本ビジネスの未来と展望」と題された立派な立て看板が立っていた。

そこは四万五千人収容の巨大な多目的ホールだった。だが二人が向かったのはホールの中ではなく、その横のロビーだった。このイベントのサブ会場が、ナリタの講演の舞台だった。これが真の「ロビー活動」。

ナリタの会社はいわゆる「ベンチャー」と呼ばれる新興企業。メイン会場に呼ばれるのはまだまだ先のこと。どんなイベントに出ても、割り当てられるのはロビーの小さな一隅ばかり。そういった環境に、ナリタは納得できなかった。会社の売上は確かに凡庸だが、CEOとしての自分の手腕は、メインステージにふさわしいはずだと信じていた。日本はバカばかりだ―彼は主催者を心の中でそう罵った。

ロビーには粗末なスクリーンと演台が置かれただけの小さなステージがあった。ちょうどその時、Netflix制作の新ドラマで脇役を演じる俳優がライトニングトークをしていた。主演はメイン会場で一時間半のトークショーを行っているが、こちらはわずか十五分。俳優は老舗劇団で培った演技論を熱っぽく語っていた。秘書は平身低頭でイベント担当者のもとへ歩み寄り、何事かを伝えた。ナリタもその後ろに従う。

だが担当者は眉間に皺を寄せ、秘書ではなく、なぜかナリタを睨みつけて叫んだ。

「間に合ってるんですよ！」

「え」ナリタの口から間の抜けた声が漏れる。

「だから、間に合ってるんです！」担当者はさらに詰め寄り、唾を飛ばした。本来のナリタならば腹に一発入れていたところだが、公衆の面前である以上それは叶わない。秘書が殊勝な態度で口を開く。

「すいません、でも早めに来た方が良いかと思って…」

「四時間も前に来られたら逆に困るんです！」担当者は声を荒げた。

「待機する楽屋もないし、メールにも三十分前で良いと書いてあるはずです。ロビー活動の小童がそんな意気揚々と乗り込んでどうするんですか！」

すると秘書は「早め早めの行動がビジネスでは大切です」と反論したが、担当者は冷笑して言い捨てた。「ものには限度があります」

勢いのまま、担当者は、秘書ではなく、なぜかナリタを両手で押した。暴力と非暴力はコインの表裏。ナリタは無様に尻もちをつき、秘書は爆笑した。担当者は首を振りながらメイン会場へ戻っていった。

「そんなところで寝てないで、準備しなくちゃ」秘書がヘラヘラしながら声をかける。

「そんなに急がなくても」ナリタは呆れつつも、少し笑みを見せた。

「善は急げ、って言うじゃないですか」

「そうだな。確かに、ビジネスはスピード感が大切だ。ただ、待つだけでは何も生まれない。ゴトーは待っても来なかっただろ」

秘書は頷いた。「あつ、ゴトウさん！最終面接に来なかった人ですね。惜しい人材でした」

それに対して、ナリタは無表情で一つ頷いた。

二人は近くのソファに腰を下ろした。くだらない会話を交わした。やがて密着し、ナリタは秘書にキスをした。「俺は生まれた瞬間からCEOなんだよ」と豪語しながら。

それから二人は公衆の面前で盛り上がった。

数時間後、秘書はショッピングモールへ出かけ、ナリタは夢も忘れて眠り込んだ。

目覚めると出番まで、あと十分。ナリタは焦らず、風のような表情を装った。スタッフに命じ、客席のパイプ椅子を撤去させ、布団を敷かせた。「寝転んで聞く講演」こそが革新だと信じていた。観衆は戸惑い一つも布団に横たわった。

壇上に立ったナリタの前に、スケッチブックが置かれた。彼はページをめくり、「おむすびころりん」と丸っこいフォントで示した。次のページには、劇画調で性格の悪そうな老人夫婦。

「むかしむかし、あるところに――働き者のお婆さんと、自堕落なお爺さんがいました」

童話を皮肉混じりに語り直し、現代のジェンダーバイアス、高齢化社会、格差問題へと論を広げた。本人は世情を痛快に切っているつもりだった。話の途中で、自社サービスや自社の労働環境の素晴らしさも挟み込んだ。終始「俺こそがトークの魔術師、そう、令和のキング・オブ・トークキング・ブルースだ」と言いたげな表情だった（というか、そう実際に誇らしげに言っていた）。

だが、観客はまったく反応しなかった。布団の上でまぶたを閉じ、寝返りを打ち、深い寝息を漏らしている。拍手も笑いも膝打ちもない。会場は、セミナー会場ではなく旅行で疲れた人々が集う街中のカプセルホテルのようだった。

講演が終わると、寝息が揃った合唱のように響いた。

ナリタは自信ありげに、口元に笑みを浮かべた。

「なるほど、今日の観客の感性はとてつもなく鈍いらしいな。バカばかりだ。しかし、人間には眠りが必要だ。俺の講演が健康に寄与したのなら、それもまた成功ってこと」

勝ち誇ったように演台を降りるナリタ。その姿を見送る観客たちは、眠ったまま一言も反応を返さなかった。つまり、実際は、見送っていなかった。観客でもなかった。ナリタと彼らはまったくの無関係の他人同士だった。

そして、その布団に眠った観客たちと同じように、ナリタの会社も、やがて静かに眠りについた。（了）